

イスタンブールの駆け落ち事情

村上薫

●蚊ほどの亭主でいいから

二〇〇二年にトルコで出版されたハティジェ・メリアムのベストセラー『蚊ほどの亭主でいいから』は、語り手が「もし私が〇〇の女房だったら」と、「家具職人」や「酔っ払い」などさまざまな職業や年齢、性格の男たちの妻の気持ちに想像をめぐらせ、亭主がいてこそその女、という庶民の結婚観をユーモラスに語って人気を博した。タイトルは「蚊ほどの亭主でいいから、いてくれない」という慣用句による。トルコでは国民の大半がムスリムだが、結婚は世俗的な民法によって成立し、一夫一婦制である。二〇一二年の結婚統計によれば平均初婚年齢は男性が二六・七歳、女性が二三・五歳である。メリアムが軽い皮肉をこめて描いたように、トルコでは結婚はするものと考えられており、

離婚の増加が警戒されることはあっても、非婚や晩婚が社会問題化する気配は今のところない。失業や低賃金労働の問題は、たとえば本特集でも取り上げられたエジプトにおけるような若者の結婚難よりむしろ、結婚後の夫婦の不和や離婚の原因をつくりだしているようにみえる。

そんな結婚大好きなトルコ社会では、世話焼きおばさんが活躍する見合結婚や親族結婚が幅をきかせる。二〇〇六年の家族構造調査によると、現在結婚しているカップルのうち、親族結婚は二一％を占める。一方、結婚における愛情はますます重視されるようになっていく。現在結婚していない男女の九〇％が、結婚相手に求める条件として、相手に対する恋愛感情を挙げている。ちなみに最も重視する条件は、女性は仕事について

いること（九五％）、男性は恋愛感情、次いで初婚であること（八六％）であった。トルコでは女性の処女性や貞操が家族の名誉にかわるため、男女の交際は制限されがちである。だが見合結婚であっても、相手への恋愛感情が重視され、性的な自由化が進む大都市の大学生のあいだでは、異性と性的な関係を含む恋愛を経て結婚することは普通のことになっている。

●母が娘に望むこと

イスタンブール市の端に位置するS区は保守的な地方出身者が多いことで知られる。そのS区でも、結婚における互いの理解や愛情が大切だという考え方は広がりを見せている。かつては傷物にならないうちに、あるいは夫の家のしきりに早くなじめるよう、一〇代

のうちに結婚させようとしたが、夫や義母たちから虐げられないためにはある程度の年齢に達して分別がついてから結婚するほうがよいという考え方も生まれている。

とりわけ母親たちは、親にいわれるままに結婚したこと、あるいは親の拘束から逃れるために相手をよく知らないまま駆け落ちしたことを悔い、娘には自分がした失敗や苦勞はしないしてほしいと望む。彼女たちの結婚の背景には、親との関係が反映されている。現在三〇代から四〇代の女性の多くは、両親との関係はより厳格で、父親はもちろん母親にも甘えたり何かを相談したりすることはできなかつたという。だから自分の娘とは友達のように何でも話す、好きな相手ができれば相談してほしい、という。母親たちが娘たちに望むのはあくまでも「理性の恋」であり、性的な関係は禁じるのにたいし、娘たちはロマンチックな恋愛に憧れるといった温度差があるとしても、結婚の風景は確実に変化しているように思われる。

そんな「自由化の波」が押し寄せるS区では、意外なことに駆け落ちの話がよく聞かれた。トルコでは昔から農村を中心に駆け落ち

